

昭和61年（一九八六）

1月 日 『大津郡志』の著者のご遺族がやつと判明。東京の萩原晋太郎氏。さっそく速達を出したところ、折り返し快諾の返事あり。共著『ちいさなちいさな出版者たち』を買って読み、小社のことをすでに知っておられたとは有難い。

1月×日 『陰徳記』『萩藩閥閥録』『地下上申絵図』の復刻許可申請を文書館に提出。不況下の大型企画は、虎の尾を踏むより怖い。しかし、これら史料への要望は思いのほか根強く、文書館の理解と協力が待たれる。

1月 日 読売新聞大阪本社から、同紙に連載中の「西日本の出版社は今」の取材に、担当の岡田孝治記者がみえる。二月上旬に出るらしい。

1月×日 毎日新聞の読書欄に、小社の賀状が紹介されている。昨年暮には朝日新聞の読書欄にも、わずかながら小社のことが出たし、ごく小さな仕事しかしていないのに、有難いこと。

1月 日 昨秋復刻した松本二郎著『萩の乱』は五百部すべて売り切れた。その前の『前原一誠伝』が三百部しか売れなかったので自重したのだが、もつと刷ればよかった。

1月×日 石川卓美著『防長歴史用語辞典』は第五校に入った。念には念を入れ、四月にはいよいよパンフを発送。五月刊行の予定である。

4月1日 『朝日ジャーナル』（4月1日号・臨時増刊ブックガイド86）に、全国の地方出版社の中から四社がクローズアップされ、小社も入っている。小さい方の代表として、ユークスを買われたのだろうか。それにしても本誌は入荷冊数が少ないため、「発売日」の今日、すでに徳山市内の書店には一冊もなく、再入荷もしないという。都会では信じられないことであろう。

4月3日 他事ながら、病気療養中の父 勇が亡くなった。享年82歳。

このマツノ書店初代は、都濃郡鹿野町から徳山へ出て、自転車による本の行商を手始めに、やがて市内で古本屋を開業した。戦後は新刊屋をやり失敗。その後古本屋にもどり、

七年前引退。生まじめでお人好しの明治文学青年で、アクの強い二代目のQ生と違い、だからも愛され、親しまれて、マツノ書店の基礎をつくった。

4月 日 日本観光文化研究所所長・神崎宣武氏の口利きにより、地元紙の「日刊新周南」一周年記念行事として、坂本長利氏のひとり芝居『土佐源氏』の公演が徳山でおこなわれ、大好評。翌日、一行と共に、この物語の生みの親、宮本常一氏の墓参りに行く。

4月×日 このところ地場産業の大型倒産が続き、周南地方の春は遠い。

4月 日 戦後四十年、広島市の繁華街で古本屋を続けてきた南海堂が転業するという。店の成績が地価の上昇についていけないのだ。超一級の場所は、古本屋にはまぶしすぎるのか。そういえば東京の神田あたりも、最近は地価の高騰が激しい。無店舗販売の盛んな折でもあり、この古本屋のメッカも、やがて、大きな変容を余儀なくされるのではあるまいか。

4月×日 『防長歴史用語辞典』の六校目を小郡町の岸浩氏へ依頼。獣医学の博士号をもち

ながら、山口県の歴史にも造詣の深い人である。さすが校正四級の腕前だけあって、こちらが恥ずかしくなるほど指摘され、“校正畏るべし”の感を深くする。

著者はもちろん、こうしてさまざまな人々の尽力を得て、本邦初の地方用語辞典がようやく日の目を見る。たしかに本書の一語一語に付されている関連史料はすごい。もはや散逸した史料も多く、五十年の歳月を支えた著者の執念がひしひしと伝わってくる。

5月 日 先日、中国新聞の文化欄に載ったエッセー「古本屋は不滅である」を増補し、『日本古書通信』に発表することになった。田舎の、しかも二足わらじの古本屋が、業界の前途を論じるとはまさに噴飯もの。あるいは中央からの距離と、兼業による複眼的思考が、岡目八目にもなっているのか。

5月×日 三百部限定の郡誌四点を一気に刊行。『阿武郡志』と『都濃郡誌』はすぐに売切れた。古本屋の店頭には、ダンピングされた各地の郡誌がたくさん並んでいるというのに、有難いこと。

5月 日 新幹線で名古屋へ。ブックシヨッ

プ・マイタウンの舟橋武志氏と昼食。四十歳で独身のひとり出版者。椎名誠に負けない文章が書け、編集の才能もある男だが、出版による赤字がついに一千万円の大台に達したので、「借金ごと、ある編集プロダクションに“身売り”し、給料まできちんともらっている」とは、地方出版者ならずとも、よだれの出そうな話。それでも半日は抜け出して、自分の仕事（出版）をやっている。ほとんど「ジョーキ」というほかはない。

5月×日 信州松本に郷土出版社を訪れ、あまりの歓迎に二泊する。春の上高地や木曾路を案内してもらい、久しぶりにいのちの洗濯を案内してもらい、次々と大型企画を成ここは社員二十人以上、次々と大型企画を成功させ、いまや地方出版の横綱として知られているが、若くて精力的な社長はいつも超多忙で、よく偏頭痛を起こすという。おなじ「火車」でも、一人乗りの方が気楽なようである。

5月 日 東京神田。朝、日本古書通信社の八木福次郎氏とコーヒー。昼食を地方・小出版流通センターの川上賢一氏と共にし、そのあと、出版ニュース編集長の清田義昭氏と、

岩波ビルの地下喫茶室で会う。夜は毎日新聞学芸部の林邦夫、『彷彿月刊』若月隆一の両氏と、湯島の絵馬亭にて一献。厚顔無恥のいなか者に、どなたもよくつき合って下さると感謝あるのみ。

この五日間の見聞によれば、出版社はもちろん、取次、書店、古本屋から出版関連企業の前二〜三割の勢力しかないようだ。その中であって、この十二年間不変の低姿勢で、地味な史料出版をつづけてきた小社の自主独立路線。その徹底した効率主義が、間違っていないかったことを再確認した旅でもあった。

5月×日 『北辰餘光』の値段について考えている。よく調べてみると、影印本というのは、売れる数が限られているせい、ページ当り五十円以上するものも多い。本書は約八頁あるので、一万五千円でも、ページ当り二十円以下という破格の廉価になる。

先着二百名の方に贈呈する『大内時代山口古図』（山口県文書館蔵 石州和紙・多色刷）は、十二年前に三千円で売り出したもので、

大内氏史料の付録としては最適と思われる。それでも予約が二百に足りないときは、出版をやめよう。

5月×日 今年になって高額本の出版が続くので、今回も古書部の「防長史料古書目録」の刊行を遠慮した。秋にはぜひ出さねば、忘れられてしまう。

6月 日 『防長歴史用語辞典』はたいへんな好評。Q生が「本の神様」として尊敬してやまない京都の寿岳文章氏からもご注文をいただき、その通信欄に、「出版が本来の意義を失いファクション化に瀕しているとき、本格的な出版にとり組むマツノ書店に心からの激励を送る。貴地、労基局に若き知人あり。地縁いよいよ深し」とあり、勇氣百倍。

6月×日 二年越しに復刻許可申請をしている『地下上申絵図』について、文書館へ再三の問い合わせをしたところ、「現在、絵図の傷みが著しく、少しずつ補修をしており、それが完了するまでダメ」とのこと。変色した絵図は元へは戻らない。傷むからこそ一刻も早く復刻しなくてはならないことは、子供にもわかる道理なのに、あるいはこれは、零細出

版社に巨額の借金を負わせまいとの、お上のあつーいお情け、有難いお達しと善意に解すべきなのか。

6月 日 県外のある出版社が、『現代防長人物史』（井関九郎著・大正6年・全二巻）を復刻しかけているとの情報あり。本書は、幕末から明治にかけて活躍した防長出身者千五百名の詳細な人物伝。類書中の白眉であり、ルーツの探索に、また山口県近代史の究明に不可欠の大著である。井関氏は昭和十五年没の著述家。小社では三年前、東京へ二度もご遺族を訪ねて復刻の許可をいただき、印税の一部を前払いし、新たに索引まで作成している。早速スタートしよう。

6月×日 出版広告業界の第一人者、日新広告社の崎村茂雄氏が二度目の来徳。一度も広告を出さないのに、よくつき合って下さる。徳山の夜も捨てたものではないらしい。仲間内での、夏の息抜き旅行のプランを練る。

6月 日 崎村氏と博多行。葦書房と、そこから分立した石風社、海鳥社を訪ねる。どこも懸命にやっているが、石風社 福元満治氏の仙人のような仕事ぶりに共鳴。ひとり出版に

は「隠れて生きる」自由もある。夜は、「九州古書業界の雄」葦書房（出版の葦書房とは別）へ行き、あい変らずの迫力に圧倒されながら飲む。

6月30日 『北辰餘光』の予約がようやく二百部に達した。パンフの内容見本を、むずかしい漢字ばかりの頁にせず、雪舟のことなどを書いた仮名交りの読みやすい頁にでもしておけば、とづくに三百をこえたかもしれないが、もとより「羊頭狗肉」の商売をする気はない。

7月 日 『よばい』のあったころ 証言・周防の性風俗』の原稿がほぼ完成。刊行に先立つて先月から、地元紙『日刊新周南』に連載をはじめた。明治大正期の「性への芽ばえ、夜這い、若衆宿、結婚、墮胎、出産」を扱ったもの。文章も挿絵も女性なので、ソフトに仕上がっており、しかも、どこにでもある作りの話の「艶笑譚」と違い、すべて本当に聞いた話だけとあって大好評。もちろん山口県では初めての本。今秋刊行、乞御期待。

7月×日 うっとうしい梅雨もようやく明け、花はアジサイからヒマワリへ。「火車」とはヒ

マワリの異名。金はないが暑さには負けない。

8月 日 三坂圭治編『毛利史料集』と、米原正義編『中国史料集』の復刻承認を新人物往来社へ依頼したところ、仲介者の顔がきいたのか、すんなりと許可がおりた。

8月×日 北海道大学の田中彰氏より電話をいただく。平尾道雄著『奇兵隊史録』は、中公文庫に入らないことになったから、小社で復刻してもいいだろうとのこと。

8月 日 毎日新聞(全国版)の読書欄で『防長歴史用語辞典』を、「本年度地方出版の収穫の一つ」と激賞。読売新聞(全国版)の読書欄には、なぜかQ生の顔写真入りで本書が紹介された。

8月×日 村田峯次郎著『品川子爵伝』(明治43年刊)を復刻すべく、ここ数年、著者の末裔を探しているが、当事者のすべてが、「うちは山口県とは関係ない」と言われるので困る。東京では今も「長州」は嫌われているのだろうか。なにも因縁をつけようというのではなく、3%の印税を支払おうとしているのに。

8月 日 店のお客の高校生が、修学旅行のみやげに京都の生八つ橋をくれた。無愛想で

怒りん坊のQ生が店へ出ないせいか、古本部の評判はとても良いのである。

8月×日 二年前、東京の出版社から復刻された田中助一著『防長医学史』が、このほどダンピングされた。大和書房の『山口県百科事典』も最後には安売りされて話題になり、

新人物往来社の『高杉晋作写真集』や国書刊行会の一連の『ふるさとの想い出写真集』は定価の半額以下で売られている。珍しくダンピングされなかったのは平凡社の『山口県地名』。しかしこちらは、会社自体が傾いてきたという。地域や専門を限定された出版には、

いまや出版社に対する固い信頼、そして独自の販売方法と、部数決定上での厳しい禁欲が必要とされているのだ。

8月 日 横浜の紀田順一郎氏から電話をいただく。推薦文のために送った井関九郎著『現代防長人物史』が届き、予想していたよりはるかに内容が良く、読むのがとても楽しみとのこと。本書の県外での評価が気になってしたが、これで今回の出版はどつやら「当確」間違いなした。

9月×日 毛利氏最古の分限帳として知られ

る「毛利氏八箇国御時代分限帳」は、備中、備後、安芸、周防、長門、石見、出雲、伯耆における文禄二(一五九三)年頃の知行高を知ることのできる貴重な史料である。その原本を筆写し、さらにコンピュータ処理した『資料 毛利氏八箇国御時代分限帳』の原稿を、著者の岸浩氏より預かる。史料の希少性と研究方法のユニークさで、相当の反響を呼びそ

うだ。
9月 日 古書の大市のため上京。神田と中央線沿線の古本屋を見学するが、新しい発見なし。

9月×日 第二市場(特価本)の最大手としても知られる八木書店社長の八木壮一氏と昼食。出版情報はあい変わらず悪化の一途をたどっているが、零細出版社は変わり身が早いので、気のきいたところは今や出版を副業にしており、危ないのはむしろ大出版社とのこと。そういうえば地方出版にもその傾向はみられる。夜は、地方・小出版流通センターの川上賢一氏、読売新聞文化部読書欄の吉弘幸介氏と飲む。全国的視野の情報を一夜にして収集できるから有難い。

9月 日 増築なった国立国会図書館を、稲村徹元氏に案内していただく。本館、参考資料室の中央あたりに、井関九郎編『大日本博士録』（全五巻）がずらりと並べてある。類書はなく、相当によく利用されている。県別の人名辞典も、館にあるものは一か所に集めてある。その数は意外に少なく、ほとんどが藩政期の人物を扱ったもので、明治大正期だけの人物誌は皆無。やはり『現代防長人物史』は、いろいろな意味で貴重な本らしい。

10月×日 秋は本が売れない。とくに十月はダメ。二十年以上も前、貸本屋の全盛期からずっとそうである。「読書の秋」とは、ほかに何の楽しみもなかった昔のことらしい。そのうえ当地のコンビニート企業の社員は半農が多いため、農繁期とも重なり、さらに学生の間テストが、これに追い討ちをかけている。今年はまだ、従業員千人の造船所が五百人の希望退職者を募るなど、木枯しならぬ不況風の吹きすさぶ周南地方の秋である。

10月 日 『よばいのあったころ』の編集、校正に一月もかかってしまい、自分の無能さに改めてあきれ。

先日、某大学に山口県郷土誌を数百冊納めたので、時間不足に加え品不足でもあり、今回も「古書目録」は見送りだ。来年二月には必ず作るということで、ひらにお許しを乞う次第。

11月×日 万全を期した『近代防長人物誌』（『現代防長人物史』改題）パンフの「内容見本」の頁に印刷不良の箇所あり。時間が許さず、泣き泣き発送。あまりにも腹が立つので、印刷代二十八万円のところを二十万円に値切る。割高ではあるが西日本では最高の技術を利用していただいたの……。値切ったからといって、印刷所への不信が消えたわけではない。

11月 日 『よばいのあったころ』の第一刷三千部出来。念には念を入れたのに、思わぬ落とし穴。カバーを分不慮の高級な紙にしたのは良いが、著者二人の顔がソバカスだらけに見える。本の価値に関係ないとはいえ、女性、しかもどちらも美人なので申しわけなく、アート紙に同じ写真を別刷りして、上から貼りつけることにした。一冊ずつ大仕事だ。

11月×日 徳山市にはここ数年のあいだに

「ブックセンター」と名のつく店が六軒もできた。二軒は新刊屋、四軒はマンガ古本屋である。最近また古本屋ができたが、これも「ブックセンター」で、七軒目。お互いチェーン店でもないのになぜ……。これは徳山に東京地名が圧倒的に多いことと同じ発想から生まれた現象だろうか。

11月 日 久しぶりに広島市の古本市会へ。ついでこの間まで新参者だったQ生が、もう古株。本の世代交替も激しく、束ねた「ハーレクイン・ロマンス」などが巾をきかせている。転業で話題をふりまいた本通りの南海堂書店は、ダンキンドーナツのチェーン店として華々しく開店した。

昭和62年（一九八七）

1月 日 昨年末は、老父の他界による喪中でのんびり過ごせたが、通知不徹底のため多くの賀状をいただき恐縮。

1月×日 不況対策の一環として、なるべく夜八時半まで営業するよう商店会から通達あり。長らく六時閉店を厳守してきたけれど、三十分だけ延長にしよう。パートはみな主婦なので、五時には帰ってしまい、代わってQ生が店へ出る。じつと店に座っている性分ではなく、お客が減ると店を閉めなくなる。金より時間を惜しむようでは商人失格だろうか。（注・今回も一週間しか続かなかった。）

1月16日 朝日新聞（西部本社版）家庭欄に『よばいのあったころ』が大きく紹介され、電話の応対に終日追われる。家庭欄のになぜか男性が九割。

1月20日 16日の朝日の記事が、東京、大阪本社版に転載され、全国各地からのあいつぐ注文中、朝から電話機はパンク寸前。肝心な本はもうみんな売り切れてしまい、怠慢な出

版社なので「品切れ」で通そうと思っていたが、それどころではない。あわてて増刷にふみ切る。

1月21日 この二日間の電話は五百件を越え、さすがにくたびれる。大都会からの注文は女性性が三割以上の上だ。本書は、宣伝力と販売力をもつ大出版社が扱えば数万部は軽く売れる内容なのに、いなかの超零細兼業出版社で、著者には申しわけない。

1月×日 『よばいのあったころ』再版出来。一冊ずつ荷造り、発送するのはたいへんな労働で、日頃の怠けグセがいっぺんに直る。

パート一名、四年ぶりに入れ替わったこともあり、仕事が二か月遅れる。

2月 日 水産大学校教授の児玉識氏来店。昨年末に発足した「西日本鯨研究会」の活動の一端として、明治四十三年に刊行された、鯨の百科全書ともいふべき珍本、東洋捕鯨株式会社発行の『本邦のノルウェー式捕鯨誌』を復刻すべく、協力を要請される。

2月×日 多忙のため刊行を延期していた『近代防長人物誌』に限定番号を記入し、発送する。高額本なので、三日間で『よばい』の

一か月間の売上を越える。この『人物誌』は、山口県会議員および県職員の部課長級、約三百名にもDMを発送したが、成果はたった三セツト。いつか『村田清風全集』（山口県教育会編）を県内の各校長宛にPRしたときも、確率は百分の一であった。

3月 日 いよいよ徳山でも郊外の大書店がビデオレンタルを始めた。音楽テープやアイスクリームの販売にも熱心。やがて本は片隅に追いやられ、ロボットに管理されるであろう。本らしい本は古書店にしかない時代の到来だ。

3月×日 萩の長老 松本二郎氏にお願いしてあった『八江萩名所図画』の校訂ほぼ完了。松本氏は八十九歳の今なお矍鑠として仕事に打ち込んでおられる。不肖Q生もかくありたい。

3月 日 四日続けてクルマーぱいの買入れ。二月にはまたまた在庫が底をつき、隙間だらけの本棚をみて「店じまいをするのでは……」と常連のお客からひやかされたのがウソのよう。

3月×日 静岡大教授の田村貞雄氏来店。初

代山口県令（知事）中野梧一氏の山口時代の日記を発掘し、解読をすすめておられる。近代史の貴重な史料として、全国的に話題を呼ぶであろう。

3月 日 支払日。あれだけの本が、たしかに目の前で動いたのに肝心なものは足りず、うたかたの「よばい騒動」のあとに残ったのは印刷所の請求書のみ。千円クラスの本を主体とするフツの地方出版社が成り立ちにくいはずだ。

4月×日 県地方史学会会長の白杵華臣氏にお願いしてあつた『山口県 右田村史』の件、防府市の了解もとれたとのこと。本書は、各方面から復刻を待たれている御園生翁甫氏の力作である。

4月 日 上京。神保町の古書街をぶらつく。地価の急騰とはうらはらに、店売りは落ちているらしい。とにかく専門書が動かないのだ。夜、萩毛利家当主の毛利元敬氏に渋谷の「ロゴスキー」でロシア料理をご馳走になる。毛利家史料復刻のことで直訴。

4月×日 名古屋でおこなわれた古書組合全国大会へ出席。

4月 日 書店へ頼めば二十日以上もかかるのに、運送店なら一週間以内に届くという「本の宅配便」が話題を呼んでいる。

小社の出版はすでに十五年も前から、書店を通さず、電話一本で翌日には届く「直販」に徹してきた。カタログによる「本の産直」である。この無店舗販売は、小社のもう一本の柱である「限定出版」と共に、いまや花形商法のひとつ。出版に王道なし。西へ西へと進めば東に出ることもある。片いなかの超零細出版社の苦肉の策、ゲリラ商法だとばかり思っていたものが、いつの間にか脚光を浴びている。何だか一周遅れでトップを走っているこの感じ、悪くない。

4月×日 小雨の日曜日。店は終日こつた返し、百円、二百円の均一本が多いとはいえ、レジの数は久しぶりに二五〇人をこえた。八時間営業なので二分間に一人とは、いなかの古本屋にしては上出来。百貨店やスーパーの一部を借りて古本を大量に売る「スーパーマシナ商法」がはやっていたが、それを一度もやらず、店売りという「直販」に徹してきた成果の一つといえようか。これからも大を願わ

ず、脚下照顧をモットーに、あくまでも基本に忠実な商売をつづけたい。

4月 日 以前から、他のものに比べ本は安すぎると思っている。このたび出版する『資料毛利氏八箇国御時代分限帳』にしてもそうだ。もはや消滅して四百年も昔の史料にしか名を留めていない、中国地方各地の諸家や社を調べるためには、わざわざ山口県文書館へ足を運び、何日もかけて原本の古文書を判読しなくてはならない。本書はその古文書を活字化し、すべての数字をコンピュータ処理したグラフや統計表をそえて、一冊にまとめたもの。類書は皆無であり、どう考えても一万円は安い。

これからの出版は、百円単位の量販本と、五千円以上の高額本とに二極分化していくと思われる。真の意味でのユニークな本をつくること。零細出版社の生きのびる道はこれしかない。

5月×日 このごろ困るのは、クズ本を売りにきて、買えないと言つと、「置いて帰るから、捨てて下さい」と頼まれること。また、買いにいった際、「タダでもいいから、もって帰っ

て……」とねだられること。出版物も軽薄短小化がすすみ、クズ本は加速度的にふえていく。そして今、捨てるのにお金のかかる時代、クズ本は古本屋の敵か。

5月 日 DM二千通を発送。今回の三点（六月 日発送の分）は広島、島根、鳥取、岡山あたりの郷土史研究者からも待たれている。この方面にもPRしよう。

5月×日 予約快調、「三点共注文」の人多し。やはり「戦国時代」は強い。目録の「維新人物」への注文激減もあい変わらず。

5月 日 昭和初期にはやった『徳山小唄』の幻の楽譜を発見。五百部を復刻して無料配布し、各方面に喜ばれる。今年の夏祭りには、踊りやカラオケにもなるらしい。戦前の徳山をうたった唯一の唄で、野口雨情が来徳したときこのレコードを聞き、「こんなよい唄があるのなら」と、自作の『徳山小唄』を途中で放棄。その草稿が残っているといういわくつきのもの。作曲した森儀八郎は、徳山女学校の先生であったが、後に名曲「紀元二千六百年」で一世を風靡した。この唄のルーツ調べでは、徳山の玉野知之氏、油谷町の中本源一

氏にお世話になる。お得意様は有難い。

それにしても、これほどの唄が数十年のうちに完全に忘れ去られるという歴史不毛の地で、歴史物の出版をしているのも皮肉なこと。

6月×日 前回配った「マツノ書店全集叢書略目」のうち、ノンフィクションは半分以上売れたが、フィクションは八割も残った。文芸物は古本屋でもダメらしい。

6月 日 『資料毛利氏八箇国御時代分限帳』『戦国期中国史料撰』『戦国期毛利氏史料撰』の三点を同時刊行し、発送に忙しい。いずれも五百部前後の予約あり。史料撰の二点は、限定五百部の予定を六百部にふやす。例によって三点とも番号入。番号の選り好みをするお客は皆無なので助かる。趣味本でなく学術書だから当然かもしれないが。

初めてDMを発送した広島、島根、岡山の研究家の受注率は予想通り約五パーセントであった。山口県地方史学会の会員八百名のうち、すでに小社のお得意となつている約五百名以外から、百五十名を選んでDMを発送したが、注文は一冊もなく、本を買う人と買わない人

との断層を改めて思い知らされる。

7月×日 大田報助編『毛利十一代史』（全十巻）復刻の件で上京。十五年前に本書を復刻した名著出版を訪れる。

「以前とちがい、郷土誌はまったく妙味がなくなつたので、よほどしっかりした地元の引人（売ってくれる本屋）がない限り自社では出せない」とのこと。やはりマツノの出番だ。

7月 日 文書館の『防長古器考』復刻を前提とした複写許可があり、直ちに一頁ずつ写真をとり、（十日もかかった）三坂圭治氏宅へ持ち込む。

本書は、藩主重就の命令で安永三（一七七四）年に作成された一種の防長文化財図録で、和本一六〇冊より成る。藩士、農商諸家、古刹こきやうなどに宝蔵される武器・什器・書画・彫刻を考証し、雲谷等うんたにらう叔による細密画を添加した、全国にも類をみない貴重史料。

8月×日 年一回いのちの洗濯。仲間六人で新潟県の妙高山へ火打岳へ。

8月 日 稼ぎ時の盆明けを三日も休んで店頭を改装。すこしはア力抜けた店になる。お

客もふえたようだ。

8月×日 元奈良女子大教授宅から教育関係の古書や資料を大量に買い、一日中汗だくになって運ぶ。お得意様の紹介のため値をはずんだので、もうけにはならないが、声をかけてもらっただけでも有難い。

8月 日 山口市の百貨店での古書即売展に一番乗りし、三坂圭治著『吉敷村史』を二万円で購入。山口市歴史民俗資料館でも本書をねらっていたが、Q生が先に買ったのでしかたなく、某古書店から同じ本を三万円で購入したとか。やはり早く復刻しなくては。

9月×日 市町村史(復刻版)のダンピングが目立つ。ある本屋の「特価書籍卸目録」によると、定価十二万円の『青森市史』がたつた三万円。定価六万円の『旭川市史』が一萬二千円など。必要以上にたくさんつくり、高い値段で売りまくった残りを、すぐ特価本屋へ叩き売るのでから、早く買った者は馬鹿をみるし、その自治体の顔も丸つぶれ。東京の出版社による、地方での荒稼ぎの二つのパターン「売り逃げ商法」である。

9月 日 北海道大学の田中彰氏が来徳され、

たのしい一夜。

文学部長の要職はたいへんらしく、お願いしてあった広瀬豊著『吉田松陰の研究』の解題は来春にのびた。今秋同時刊行の予定だった『品川子爵伝』『奇兵隊史録』も延期となる。

9月×日 山口市歴史民俗資料館に内田伸氏を訪れ、「古典的町村史復刻シリーズ」の相談にのっていただく。

『大内村誌』の監修者・河野通毅氏の令息で、執筆者の一人でもある山口大学名誉教授の河野通弘氏を初めて訪問。突然の申し出にもかかわらず、復刻の快諾をうけた。そのうえ復刻用の原本として、新品同様の本書を二冊も提供してくださり感謝感激。この『大内村誌』は、小社の古書目録にまだ一度も登場したことがない真正正銘の珍本である。歴史学者で、中世大内氏の研究者としても知られる福尾猛市郎氏が広島を去られるに際し、山口県関係の郷土誌を小社にわけていただいたときも、本書だけは手離されなかったのをよく憶えている。

9月 日 先号の「マツノ通信」で、復刻の原本にするため『右田村史』の提供をよびか

けたところ、九名の応募あり、かたじけない。

今回は地元優先で、防府市付近の三名の方にお願いする。

10月×日 大阪、京都、名古屋の出版社を訪問しながら、二日ばかりで上京。本郷の木内書店、神田の慶文堂で情報を収集。NHKとの打ちあわせなど。東京は一気に仕事がかかどる。

10月 日 東京のNHKから、坪倉史、鈴木健次の両チーフ・ディレクターをはじめ五名が来徳され、二泊して、Q生や店を取材。航空便のある所なら一日ですむものを、申しわけなし。

10月×日 「ブックインとつとり」87・本國体」のシンポジウム「地方出版と地方文化」に出席のため倉吉市へ。六年前にもこの地で同じような催しがあり、やはりパネリストの末席を汚したが、今回はその時とは違って変わった低調ぶり。来会者も少なく、報道陣ばかりが目立つ。思えばあの頃が地方出版のピークであった。山口県でも十社あまりが出版をはじめたが、残っているのは小社だけ。全国どこも似たようなもの。地方出版の秋も深い。

このたびの収穫は、諸先輩とおでん屋で旧交を暖めたことと、壇上で自分の頭の回転の鈍さを再確認したことのみ。

10月30日 夜、NHKのETV8、「出版・流通・読者」をみる。

例の「ブックインとつとり」を枠に、現在の出版状況をかいつまんで見せた好番組。その中で地方出版社の代表としてこのQ生が登場し、いつぞや発表した「図書館七不思議」のさわりなどを話す。Q生の出番がいちばん長く、方々にお知らせした甲斐があった。しかし、ピリツとしない顔を長く写されるのはいやなもの。母親からも「口下手でみっともない。これからは出ちゃあいけんよ」と言われてしまった。

11月 日 三十日のテレビをみた人から、たくさんのお便りをいただき、返事を書くひまもなく嬉しい悲鳴。はじめて「図書館七不思議」を聞いた人は、みんな心から共鳴されているようだ。また「古本屋は本の生涯を墓場の方から眺めている、本の閻魔大王である」という発想も印象に残ったらしく、東京の随筆家 河村蝉太郎氏からのハガキの宛名は

「閻魔大王Q世主」となっており爆笑。

日頃、DMを通じてしか接していない各地のお得意様にも親しみを感じていただけたらしく、それだけでも良かった。

11月×日 地方・小出版流通センターの川上賢一、読売文化部の吉弘幸介の両氏来徳され、一献。一時不振であった専門書や硬い本がまた売れはじめたとか。当然の活字復権である。11月 日 急に寒くなる。例年のことながら秋は不況で、寒気がひとしお身にしてみる。皮肉なことに「読書週間」がいちばんヒマのよう。街の景気も沈滞ぎみ。

12月×日 久しぶりに三坂圭治氏を訪問。お願いしてあった『防長古器考』の校訂は予想外に難航しており、一晩に二―三頁も進まないこともある由。これでは明春の刊行は無理だ。百点目の記念出版は別に考えよう。

12月×日 いろいろ考えているが、百点目は『毛利十一代史』になりそう。山口県近世史の研究に不可欠の根本史料なのに、まったく入手困難。復刻版さえ全国の古書市場へ三年に一度くらいしか現れないし、十五万円以上もしてはどうにもならないからである。本書は

全十巻、七千ページもの大著なのでこれまで敬遠してきた。一万円以上の高額は売れないといわれている現在、一步誤れば、百点目にして倒産、夜逃げとなる。このスリル、釣りやパチンコの比ではない。おかげで、ほかの賭け事や遊びをしなくてもすむ。

12月 日 山口市へ。かつて二十年近くも、文書館や自宅で『毛利十一代史』の研究会を主催してこられた広田暢久氏（元山口県文書館副館長）を訪れ、本書復刻についてのアドバイスをいただく。「どれくらい売れるかはわからないが、復刻すれば多くの人たちに喜ばれるのは確か」とのこと。

12月×日 東京で『毛利十一代史』を安く印刷・製本してくれるところを探す。印刷所はすぐ決まったが、製本所はいちど大阪に決まり、あとでまた東京になる。何のことはない、いつも注文している瞬報社（本社下関）の東京工場に落ち着いてしまった。

12月 日 神田の特価本屋に、二十年前に出た『上杉史料集』（人物往来社）が、三冊六千円でダンピングされている。まだ売れ残っていたのだ。同じシリーズの『毛利史料集』

『中国史料集』の二冊は当時すぐに売り切れて古書価がつき、昨年小社で復刻し、一冊六千円ではほとんど売り切れてしまったというのに……。山口県はほんとうに有難い。

12月×日 『毛利十一代史』スタート。初めての印刷所なので、手付金 百万円を送る。もう後へは引けない。

今回は印刷所が遠いうえ、全十巻を別々のところで作っていくので、残念ながらこれまでのように限定番号の記入はできない。しかし三百部の限定出版にしては格安なのでお許しいただこう。

12月 日 多忙のため再PRをしなかったのに『大内村誌』『吉敷村史』『右田村史』の予約が限定部数をこえた。締切後、防府市立図書館や国学院大学ほか、たくさんの電話注文をすべて断わり、損をしたような妙な気分。

小社の基本方針である「カタログ販売」「本の産直」「限定出版」などがようやく市民権を得たためか、あるいは先日、至天に小社が登場したことへの祝儀か、または単なる部数の読み違いか、いずれにしても有難いこと。

昭和63年（一九八八）

1月×日 年末は31日ぎりぎりまで営業。長男なので、元日はいつも親族が二十人近くあつまる。二日は家内の里へ挨拶にいき、一二日にはもう開店する貧乏所帯。三日といえばこのQ生の誕生日なのに、毎年正月ポケで家族はみんな忘れている。まあいいか、日本人が祝ってくれているのだから。

1月 日 山口大学教育学部で日本美術史を専攻しておられる影山純夫氏を訪れ、『防長古器考』校訂の助っ人を依頼。

1月×日 ガンで急逝した知人の蔵書をクルマ一杯買う。本は読んでも減らないし、場所をとるせいか、本好きの奥さんには本嫌いが多い。息子が父親の本を活用することも少ない。「蔵書一代」とはよく言ったもの。

1月 日 上京。神保町で入手した「慶文堂古書目録」最新号に、小社が五年前、十一万円で復刻した『防長風土注進案』が何と四十五万円出ており、びっくり仰天。二万六千円で刊行した『防長地下上申』も九万八千円。

みんな四倍だ。

小社の出版は会員制のようなもの。「会員」には可能な限り廉価に提供するが、それ以外の人たちのことまでは考えていない。いつ倒れるかもしれない超零細出版社には、不特定な潜在読者の面倒までみることはできない。

これからも極少数部の限定出版に徹するので、とにかく「予約特価」で購入していただくしかない。

1月×日 東京では、片田舎の超零細出版という珍しいキャラクターのおかげか、このところ各方面から分不相応の歓待を受け、面映ゆい限り。

2月 日 『大内村誌』『吉敷村史』『右田村史』の三点一挙に入荷。一冊ずつ朱筆で限定番号を記入し、順次発送。ちよつど一週間かかった。

今回の注文者は、山口市内25%、それ以外の県内45%、県外30%であった。

2月×日 雑本をもて余し、スーパリーの軒を借りてやっと処分している一般の古本屋と異なり、小社の古本部は薄利多売のせいにか、いくら大量に入荷しても、すぐガラ空きになっ

て困る。

いよいよ春の大移動期、買入れの電話を鶴首して待つ今日この頃。

6月 日 東京。毛利家の当主・毛利元敬氏に、新橋の第一ホテルで極上のフランス料理をこちそうになる。

『毛利十一代史』の復刻はよくやった。アツバレ、アツバレという次第。

十年間も探し求めていた『品川子爵伝』の極美本を、やっと神田の沙羅書房でみつけた。五万八千円也。すぐ購入して、東京の印刷所に持ちこむ。

6月×日 『資料毛利氏八箇国御時代分限帳』の編者岸浩氏、心不全で急逝され、葬儀に出席。享年六十二歳。

お願いしてあった『八江萩名所図画』の校正が終わり、小郡のお宅へ受けとりに参加したのは、亡くなる二日前。あまりにも急で、信じることもできないほど。

獣医学博士という独自の視点から、山口県の歴史をみつめ、数多くの論文を発表していた人で、校正の腕前も一流。まだまだこれからひと仕事してほしい人だったのに、残念。

この『八江萩名所図画』の校訂をお願いした萩の松本二郎氏は九十歳という高齢で、本書の刊行を心待ちにしておられる。来春には必ず出さねば。

7月 日 「出版目録を送ってください」とよくいわれるが、つくっていない。ほとんど限定出版で、そのつど完売し、在庫がないためである。置き場や金策にあくせくしてまで、本を余分につくる気はない。

7月×日 「珍しい本があるけど、復刻しては？」と、山口の樹下明紀氏が一冊の本を貸して下さる。表紙、扉、目次、奥付のとれた欠陥本ながら、銅版画による県内の社寺図録だ。たしかに珍しい。何とか完全なものをみつけて復刻しよう。

7月 日 灯台下暗し。県内どこにもないと思われた本が、なんと地元の徳山市立図書館にあった。題名は『大日本名所図録・周防長門之部』。これではわからないはずだ。館長の田辺朝一氏に懇願してこの稀観本を借り出す。物わかりの良い館長に感謝。

7月×日 「東京の」という出版社ですが、『品川子爵伝』を復刻したいので、著者村田峯

次郎氏の子孫について教えて下さい」という怪電話あり。「残念ながら小社では、ずいぶん前から本書の復刻を準備しています。聞いてもらって良かったですね。カチ合ったら、おたくは大損をなさるところでした」と答える。

8月 日 広島市と小豆島から、歴史、民俗学関係の本を大量に処分したいという相談あり。しかし、うちは山口県関係以外は弱いからと、どちらもそれぞれ他店を紹介。つい、売る人の立場になってしまつ。もつとガムシヤラにやらなくてはもつからないのに……

8月×日 夏休みを三日とり、立山を縦走。メンバーは、北九州、広島、千葉などからあつまつた不良中年男女六人。いずれも元徳山の住人である。

久しぶりの紫外線でまっ黒になって下山。帰り亀信州の葛温泉で、松本・郷土出版社の歓待を受ける。ここは小社とは対極の大地方出版社で、社員も約三十名。最近は岐阜、静岡にも支社をだし、名古屋も狙っている。

8月 日 山口の石川卓美氏にお願いしてあった『趣味の山口』復刻版への「あとがき」が届く。刊行が遅れている『八江萩名所図画』

の極美本一組も同封してあり、提供して下さるとのこと。これだから急いではいけないのだ。本書はすでに三組あつめているが、いずれも印刷にやかすれがある。この石川本はとびきり刷りが良い。原本はこれにしよう。待った甲斐があった。

8月×日 毎日新聞(山口版)に一五〇〇字の随想を月一回、約一年連載してきたが、今回の「いなか本屋の一日」で終り、ほっとする。わりと好評だったらしく、嬉しい。

8月 日 五年前、『大分県社寺名勝図録』を復刻した熊本 of 青潮社に、電話でそのときの様子を聞く。意外や意外、「あの本はさつぱり売れず、大損をしました。五百部も刷ったのに、三分の一も売れず、まったく予想外でしたとのこと。これは困った。

すでに印刷所へ入っているので、中止するわけにはいかぬ。八百部つくって安く売ってもりだったが、方針を変えよう。熊本の人が大分の本を売るとちがい、こちらは地元だ。原本もこちらの方がはるかに美しいし、印刷、造本とも最高のものを少数数なら、売れぬはずは絶対がない。

8月×日 地方・小出版流通センター代表の川上賢一氏など九人の「米国書籍流通視察団」で、この九月、ニューヨーク、ワシントン、ロサンジェルス of 図書館、新刊店、古書店を見学することになった。東京 of 出版社、取次、新刊店の人たちにまじり、田舎代表はこのQ生のみ。

8月 日 山口市にパスポートをとりにつたついでに、歴史民俗資料館館長の内田伸氏を訪問。

長いあいだ県内の慶長以前の金石文の拓本をとつておられるが、ようやく終り、来春には刊行できそう。

8月×日 『周防の女たち』大詰めで上京。著者は千葉、監修者と装丁者は東京、印刷所は下関なので、小さい本ながらたいへんだ。

9月 日 昨夜おそく東京から帰り、今日は下関の印刷所へ。東奔西走とはまさにこのことだ。

9月×日 九日間のアメリカ旅行。仕事に直接プラスすることはなかったが、異文化への接触は国内では得難い体験であった。朝日新聞(山口版)に印象記を三回連載することに

なる。

10月 日 『周防の女たち』出足好調。一週間で一千部売れている。

11月 日 NHK of ETV 8 「文化時評」に『周防の女たち』の島利栄子さんが山で、鈴木健次アナウンサーと対談。月一回、NHK テレビの読書欄ともいうべき番組だ。県内のマスコミはもちろんのこと、朝日新聞(全国版)の読書欄「らいたあ登場」にも大きく出だし、東京新聞にも8段抜きで取り上げられ、たいへんなPRになった。いまや全国では、一日に百冊以上の本が出版されており、何冊書いてもなかなか話題にならないのに、たった一冊でこんなに脚光を浴びた人も珍しい。

11月×日 県外各地より『しゅうぼうの女たち』を送ってくださいとの電話しきり。図書館員も含め、ほとんどの人が『周防』(すおつ)とは読んでくれない。

11月 日 『山口県社寺名勝図録』の予約が限定部数をオーバーしてうれしい悲鳴。

11月×日 復刻用の原本にと、毛利博物館から新品同様の『八江萩名所図画』を二組も寄贈していただく。そのうち一組は何と特製帳

入りの殿様用。

まだまだ何組もあるという。さすがは毛利家。

12月 日 下関水産大学の児玉識氏、久し

振りに来店。以前、一度復刻の話が山で、完全な原本がないのでそのままになっていた

『くじら・本邦のノールウエー式捕鯨誌』（東

洋捕鯨株式会社発行）の、美本を持って来ら

れた。これは明治四十三年に刊行された、我

が国における鯨学の古典。鯨についての百科

全書ともいべき貴重な本。社会党の水産部

長で、小社のお得意でもある千葉の石田好数

氏に、わけを言って借りられたとのこと。二

年前にできた「西日本鯨研究会」のためにも

ぜひ復刻したいとか。これも郷土誌だ、取り

組んでみよう。

12月×日 おそまきながらファックスを入れ

た。いちばん安い、電話と共用のぶんである。

昼でも掛かるけれど、夜間は特にファックス

専用におくつもり。「ご来信を待つ。

12月 日 『陰徳記』の復刻許可が毛利家から

下りた。すでに国学院大学の米原正義氏に校

訂をお願いしてあるが、本になるのは一年く

らい先であろう。

平成元年（一九八九）

1月×日 下関市立図書館、同長府図書館へ

挨拶にいき、歓迎される。数えてみると十年ぶり。こんなことではいけない。県内各館を、

少なくとも二年二回は回らなくては。

1月 日 『伯曹流柔術絵巻』のパンフ出来。

これまで百余点の出版物パンフのうちで最も

豪華である。本のほうも、このパンフに負け

ないものを作ろう。

1月×日 『伯曹流柔術絵巻』PRのため、束

見本を持って上京し、武道関係の書店や出版

社を回る。「こんな資料はこれまでにない、と

ても貴重だ」「安すぎてペイしないのでは？、

専門家はこの倍の値段でも買うのに……」「六

百部ではとても足りないよ！」との声ばかり

で、気を良くする

2月 日 山口市歴史民俗資料館館長、内田

仲氏のライフワークの一つともいうべき『山

口県の金石文』の原稿がほとんど完了した。

小社が出版を始めた頃、すでにある先生から

「内田さんの金石文のお仕事を本にしなさい」

と言われたことがある。つまり十五年以上も

前から取り組んでこられた研究で、県内の慶

長以前のあらゆる金石文を実地に調査し、写

真と拓本で後世に伝える本である。

クルマを持たない内田氏が、念には念を入

れ、同じ場所に何度も何度も足を運ばれただ

けあって、拓本も写真も非常によくとれてい

る。このような出版物は他県にはほとんど例

がない。今や現物の無くなったものも多く、

その意味からも本書の価値は計り知れない。

2月×日 ワープロを買った。店のレジスター

の、たった0から9までの押しボタンさへ十

年たつても覚えられないQ生なので、すぐに

埃をかぶってしまふかと思っていたが、案ず

るより産むが易しとか、使ってみると意外に

便利で、しかも面白い。お客様の宛名もこれ

まではずっと手書きを通してきたが、ワープ

ロ文字になるかもしれない。これも時世とい

うものであろうか。

3月 日 店で二年以上も二万円で棚ざらし

になっていた『日本文壇史』（特装版 24冊揃）

を東京の市会へ出品したら、四万三千元に売

れた。特殊な本でもないのに、何というハン

デイ。

3月×日 『伯書流柔術絵巻』の中島篤巳氏、『防長百山』の安倍正道氏それに「中国新聞」で中国山地を担当している山内雅弥氏など多士済済のメンバーで、室津の皇座山に登る。中島氏の活躍で、東岸沖の浦からのすばらしい登山道が見つかり、大喜び。中島氏は来年『周防一〇〇山百景百山』を小社から出す予定で、毎週二か所くらい登っておられる。阪大の医学博士、武道の先生、手品の名人と、天は二物も三物をも与え給うものらしい。

3月 日 この「火車日誌」ほか、あちこちに書いてきたQ生の雑文をまとめて出版しては、とよくいわれる。

自分のことはわからないので、評論家の紀田順一郎氏、『出版ニュース』編集長の清田義昭氏など数名の先生方にお伺いを立てると、異口同音、すぐ本にせよとのこと。「おだてりや豚でも木に登る」とか。今秋あたり、マツノ書店の出版史上で、内容・寿命とも最も軽薄知小な本が刊行されるかも。

3月×日 文書館の許可もおりたので、さっそく『陰徳記』81巻のコピー約五千枚をとら

せてもらい、すぐ東京の米原正義氏へ持参。戦国期中国地方史のベストセラー『陰徳太平記』の原史料ともいえるべき本書を、一日も早く出版できるよう願います。

3月 日 消費税がらみで諸物値上昇の様相。何事もヘソ曲がりのQ生、ここは企業努力で3%を解消し、逆に、時流に抗して価格を下げていく所存。今回PRの三点は、大巾値下げをたしかに実現した。いつまで続くか？

5月 日 この四月以来の傾向であるが、「ゴールデンウィーク中も古書部への来客多し。「悪税」を取らないので好評なうえ、全般的にも消費税による生活見直しの一環として、古本屋の存在がクローズアップされてきたのではあるまいか。

5月×日 六〇〇部限定でスタートした『伯書流柔術秘伝絵巻』の予約が、何と八五〇部になった。東京の大出版社や専門出版社が敬遠したものを、蛮勇を振るって取り組み、成果をあげたのだから嬉しい。

5月 日 上京。九段のホテル・グランドパレスで紀田順一郎氏と対談。今秋刊行する拙著『六時閉店 地方出版の眼』の巻頭を飾る

ものである。当代随一の読書評論家に、自分の仕事や文章をたいへん褒めて頂き、有難くも面はゆいかぎり。

6月×日 このところ買入れが増え、店もストックも満杯。古書部のパートは毎日、雑本との格闘に大童である。この傾向は、東京より五、六年、広島に比べても三、四年遅れている。情報は瞬時に伝わるけれど、物流はそうもいかないらしい。

6月 日 『防長史料文献解題』出来。しかしこれは最低。印刷が全体に薄い。読めないことはないが、どう見ても小社の名前で出せるような代物ではない。直ちに刷り替えたいところだが、これがまた最悪のタイミング。五月刊行の予定を一か月以上も延期した後だし、『吉田松陰の研究』『伯耆流柔術秘伝絵巻』などと一緒に発送すべく、あらゆる準備も完了している。そのうえ税務対策上も、これ以上延ばすことはできないので、泣き泣き発送する。

思えばちょうど十年前『萩住民運動史』も印刷不良で泣かされた。あのときも安く売ろうとしての事であった。やはり印刷費をケチ

ると、ろくなことはない。十年に一度の愛嬌としてお許し願いたい。

7月×日 山口市が市政六十周年を迎えている。原史料のエッセンスともいふべき、昭和八年版の『山口市史』と、昭和六年刊のユニークな郷土誌『趣味の山口』の復刻許可を取っているが、便乗出版はしたくないので、もう少し先に伸ばそう。そういえば今夏は山口県立博物館で『高杉晋作と奇兵隊』展があり、年末には民放の全国放送で、奇兵隊をテーマにしたドラマが放映される。高杉東行（晋作）生誕生百五十周年なのだ。平尾道雄著『奇兵隊史録』を復刻すれば売れそうであるが、これも来年にしよう。

7月 日 読売新聞（全国版）の読書欄に八百字の随想を四回連載することになった。八月には出るらしい。乞御一読。

7月 日 店の盆休みを早目にとり、店の慰安旅行。総勢五名で尾瀬へ。好天に恵まれ、最古同のレクリエーション。

帰途、東京に寄り、神保町で『本邦の諸威士捕鯨誌』の市場調査。魚関係の専門店はさすがに名前だけは知っているが、その店さえ

「欲しい本ではあるが、まだ一度も扱ったことがない」という。「どこを探しても無いでしょう。鯨の古書はめつたに出ない上、ものすごく高いですよ。」これでOKだ。

ところで本書の題名であるが、「諾威式」では、せっかく復刻しても、また忘れられてしまいそう。それで、『明治期日本捕鯨誌』に改題すべく関係者各位の快諾を得た。これは決して「羊頭狗肉」ではなく、本書の内容を最も確に表わす正しい題名だと思う。カバーや奥付に原題を併記すれば学問上も問題ない。

8月×日 神崎宣武氏にお願いであった『六時閉店』への解説ができた。しかし、これもまた分不相応なほめられ方で、恥ずかしくて外を歩けなくなるくらい。どうやら初めと終わりだけ読んでもらえば、中は読まないほうがよい本になりそう。最近よくある「カバーだけ最高」の本より少しはマシか。

8月 日 『防長史料文献解題』について、直接のお叱りはどこからも全然なく、逆に、「これくらいどうってことない」と言ってくれる人も多かった。

本書は値引きをするつもりだったのに、す

でに送本準備を完了して出て出来なかったの、そのかわり、拙著『六時閉店』を思い切つて値下げすることにした。どうか、「この本は関係ない」と言わず、「江戸の敵を長崎で討つてほしい。B6判上製三五〇頁、ふつう二千円以上はしてもおかしくないのに、その半額以下という小社としては破天荒の大特価。そのうえ送料もサービスである。」

8月×日 山口県立美術館でおこなわれている「大内文化の遺宝展」での記念講演のため来県された、国学院大学教授・米原正義氏ご夫妻と岩国の徴古館でお会いし、『陰徳記』についての打ち合わせ。かなり進んではいるが、千頁以上もある本を一人で校訂・校正していくのは、実にはたいへんなことだ。

8月 日 久しぶりに山口へ。『防長古器考』の校訂をお願いしている山口大学の影山純夫氏とともに三坂圭治氏を訪問し、「ご意見を拝聴する。影山氏の仕事は八割がた終わっており、本書は来年の「目玉」になりそう。

8月×日 恒例の夏山登山。北九州、広島、千葉などから不良中年男女七名が参加し、加賀白山に登る。日頃のおこないが悪いためか

台風とかち合い、雨の中を何も見ずに登って下りる。

二晩目は、赤穂谷温泉で一年間つもったア力を落とす。

8月 日 毎年のことであるが、八月は遠方からの来客が多い。せつかく見えても、店主は店にいないことが多いし、「山口県郷土誌」以外は雑本ばかりで、申しわけなく思っている。

9月×日 「女性向けの人生論やハウトゥ物は、古本屋ではダメですよ、外側ばかりで内容がないから」と、売りにきた人の前でさんざん悪口を言いながら、三十冊を二千五百円で買い、ちよつどそばにいた家内から、「お客様にそんな言い方、失礼よ」とたしなめられた。あとで古書部のパートに聞くと「千五百円が相場」とのこと。フツの古本屋なら、本をほめたうえ、千五百円でスマートに買うのだろう。やはりQ生が店へ出るとロクなことがない。

9月 日 あちこちから郷土誌を売って頂くのに、このところ『古書目録』を出していないので、本はたまるばかり。本紙第四面のよ

うな目録では焼け石に水。ひとつワープ口を活用して、手製の目録でもつくってみようか。

9月×日 前長府図書館館長の中西輝磨氏が、「山口新聞」へ連載された「戦後防長人物誌」(仮題)を小社で出版することになり、校正を急いでいる。夏目雅子、林芙美子、出光佐三、久原房之助など、昭和二十年以後現在までに亡くなった、山口県にゆかりのある七百人についての人物誌。政治・経済に偏らず、広く文化全般に目がいき届いており、文章も簡潔で要を得ている。資料的にはもちろん、一般の読み物としても十分いけそう。

9月 日 『六時閉店』の校正がなぜか六校。ひと月くらいこの仕事につききりのような気がする。一応発表した文章なのに、順番を並べかえたり、用語や表現の不統一の修正等でいつのまにかこうなってしまった。これだから普通の出版はできない。それにしても、嫌になるほどの無能ぶりに、我ながらいささがガククリ。印刷所にも迷惑をかけ、申し訳ないこと。

9月×日 『六時閉店』の装丁を東京のブックデザイナー津田公子さんに頼んだのはよいが、

こともあろうに、このQ生の横顔をカバーに大きく使われてしまった。すべてを一任しているのでもさら引つ込みもつかず、「著者の顔をカバーに使った例はこれまでどこにもなく、「本邦初」です」という殺し文句に引かれ、あえて「客寄せパンダ」になることにした。(ただだ「お客が逃げる」などというのは) 9月 日 佐賀県呼子での貸本屋の集まりに、十五年ぶりに出席。

各地とも、なぜかQ生が貸本屋をやめた当時のメンバーがそのまま、若い人はほとんどいない。まるでタイムトンネルをくぐり抜けたみたい。

しかしよそ事ではない。地方出版も同じだ。四十代を境に、若い出版者は皆無に等しい。そのうち痴呆出版にならねばよいが……。

平成2年（一九九〇）

1月 日 上京。『出版ニュース』編集長の清田義昭氏に、「古本屋」をテーマとした随筆の連載を依頼される。熱のさめかけていた古本の仕事に少しは身が入っていいだろう。

1月×日 年一回の決算。経済学部を出たのに、なぜか経理は苦手で、すぐ眠くなる。この仕事をきちんとしなければ儲からないのだが……。

1月 日 索引作りの名人、山口の田村哲夫氏に、『防長回天史』の全面校正と新しい「人名・事項索引」の作成を依頼していたところ、とても精力的に取り組んでおられる。大変な仕事ではあるが、あとは時間の問題だ。

1月×日 毛利家と山口県文書館より、『新裁軍記』の出版許可が下りそつである。本書は『萩藩閥閥録』の編者、永田瀬兵衛の筆になる中世軍記の圧巻。

1月 日 生まれて初めて、二泊三日の人間ドックへ入る。『六時閉店』で欲を出さず、のんびり過ごしているだけあって、検査した十

四の項目はオールA。つまり、どこにもまったく異常はなかった。頭と口が悪いのと、足の水虫くらいは我慢しなければ……。

1月×日 毎年のことながら、この季節は店の棚が品薄になる。文庫本は入ってくるはしから売れていき、いつも棚の風通しが良い。女性に人気のあるハーレクインなどは、一年中慢性の品不足。文庫本やハーレクインは、どこの古本屋も持て余しているというのに……。薄利多売の効用か、あるいは単に立地条件が良いだけなのか？

それにしても、このマンガの洪水はどうだ。毎年三月がピークなのに、もう毎日ぞろぞろ持つてこられる。いくらどこよりも高く買うからといって、倉庫は一杯になるし、この洪水には薄利多売も追いつかない。

2月5日 日本経済新聞の夕刊に、六段抜きでマツノ書店が出た。全国版に出版社としてでなく、古本屋として紹介されたのは初めてのこと。

2月 日 美祿市に『来嶋又兵衛伝』の著者三原清堯氏の未亡人を訪ね、同書復刻の要望を気持ちよく聞いていただく。

2月×日 京都に奈良本辰也氏を訪問。相変わらずとてもお元気で、執筆や監修の仕事に精を出しておられる。「今年は明治維新ものばかり言ってくる」とのこと。

まず『防長回天史』の推薦文をお願いし、快諾を得る。そのとき持ち出された十二冊の原本をみると、たくさん挟まれている栞代わりの紙切れは、古色蒼然とし、背中のクロスが見事にはげ落ちて、つるつるになっているものもある。「この本には、ずいぶんお世話になりました」としみじみ言われた。これに完璧な「索引」さえつけば、維新史研究は鬼に金棒だとか。

夜は松籟社の社長、相坂一氏の肝入りで、京阪神の出版関係者や新聞記者各位と一献。

2月 日 『八江萩名所図画』が予定より二週間も遅れてやっとできた。見事な仕上がりに満足。すぐ一冊ずつ朱で番号を記入して発送する。

「三百部限定で二百七十部の予約」と思っていたが、発送してみるとほとんど残らない。つまり予約が三百ほどあったのだ。このコンピュータ時代に間抜けなこと。

2月×日 なんとこのQ生が、人前で講演を

することに。3月6日に、神楽坂の日本出版クラブでおこなわれる「本の会」の例会で、一時間半も話すのである。これまで地元のロータリー・クラブなどから依頼はあったが、一切断ってきた。しかし、東京のど真ん中で、自分のやってきたことや主張を専門家に聞いてもらえるチャンスなど滅多にないので、例外をつくり、応じることにしたので。「旅の恥はかき捨て」とも言うではないか。

2月 日 北海道大学の田中彰氏に電話で『防長回天史』復刻版への推薦文などを依頼。電話はありがたい。

2月×日 目下六校中の『昭和山口県人物誌』の「人選」について、二、三の学者に気付きを聞いていたが、異口同音、「客観的な人物誌」はありません。人物誌というものは、だれが作っても独断と偏見に満ち満ちたものになるけど、それでいいのです。亡くなって何百年たつてからでも評価が変わっていくのに、同時代に生きた人を選ぶのは至難の技。あら捜しをせず、「無いより有ったほうがまし」と思えば、これほど便利で、しかも面白い本

はありませんよ」とのこと。

そういえばこれまで小社が復刻した防長史関係の「人物誌」三点も、多少の毀誉褒貶はあったが、すぐに売り切れ、どこでもよく使われている。

2月15日 聖教新聞の文化欄に、Q生の「出版の流通を考える」という随筆が掲載された。『出版ニュース』の清田氏によると今年出版界最大の問題は「再版制」とのこと。「本の直販」の重要性がようやく見直されてくるのだ。

2月 日 三坂圭治氏にお願いしてあった『防長古器考』の校訂二千七百枚が、あつという間に出来た。

足を悪くされ、ずっとお家に引きこもりきりなので、心配していたが、どうしてどうして、「快刀乱麻」の冴えは、昔日とまったく変わっていない。明治の人は強い。

2月×日 上京。柏書房で『防長回天史』復刻計画の有無を打診。もちろん「計画無し」とのこと。

神田の古書店に『防長風土注進案』が何組あったが、申し合わせたように「四十五万

円也」の正札。ありきたりの本は、目も当てられないくらい安くなってきたのに、特殊な本だけは、どんどん高くなっていく。

日本経済新聞の文化欄に、内田伸氏が、このたび刊行される『山口県の金石文』について、一文を草されることになった。同紙の売り物、最終頁の大スペースなので、積みもり積もった苦勞話をすべて吐き出してほしい。